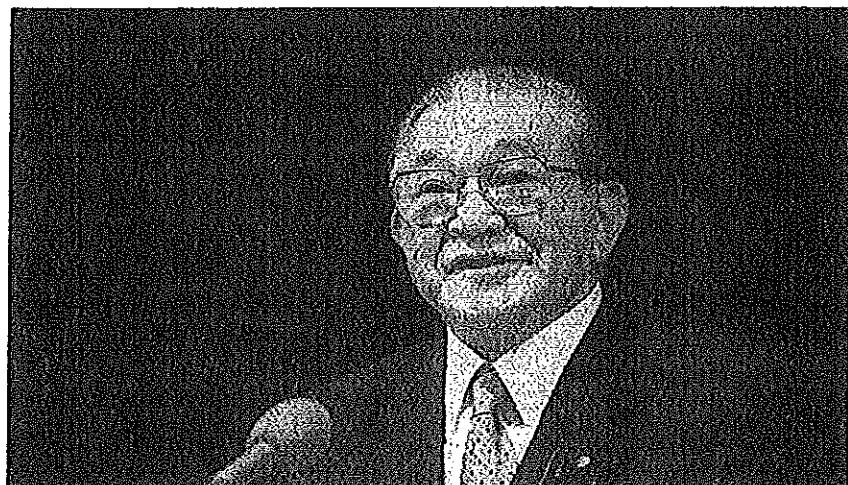


『教育振興運動の始まり』



岩手県知事 工 藤 嶽

本日は教育振興運動の30周年記念大会が、県内各地から皆様方多数ご参会のもとに盛大に開催されまして誠に慶賀にたえません。そして、本日栄えある表彰をお受けになられました12団体の皆様方の今日までの活動に対しまして心から敬意を表する次第であります。今後も、一緒に岩手のために、子ども達のために、岩手の教育のために頑張っていきましょう。

昭和30年代の岩手教育界

この教育振興運動は、昭和39年の4月、教育基本計画と言うものができたときに、その基本計画の中にはじめて登場いたします。これは、子ども達も、父母も、学校も、地域社会も、行政も、人の責任にしないで、自分の責任だと考えてしかも力を合わせて取り組むのでなければ、教育の発展はないという趣旨なのであります。この教育基本計画が、なんで岩手に生まれてきたのか。こういう計画を作ったのは当時全国で岩手だけなのであります。運動ももちろん岩手だけであります。なぜ岩手でそれができたのかというと、昭和30年代の初めの岩手の教育の状態を一言申し上げない訳にはまいりません。

私は昭和32年に岩手県の林務課長から社会教育課長として教育委員会に参りました。そのころ岩手県の教育委員会は岩手県の教員組合と事あるごとに対立抗争を重ねておりまして、団体交渉、5人の教育委員さんと教育長以下各課長が列席して、話し合いを行うのでありますが、交渉とか話し合いなどと言うものでは無い状態だった。2千人近い先生方が教育庁の建物を取り巻いて、話し合いは夜まで続く。夜が明けて朝まで続く。徹夜であります。私は当面の交渉とは担当が違っております。社会教育の課長でありますから、もっぱら社会教育の振興、団体の活動、村づくり運動などを盛んに県の知事部局の皆さんと一緒にやっておったのですが、その交渉には列席する。これはもう大変な騒ぎなのであります。私は多くの先生方が子ども達を学校に残して、こうして動員と称して団体交渉をやると言うことは、困ったことだなあ。これは私ばかりじゃない、皆そう思ったと思うのですけれども、そういう時がありました。文部省は勤務評定をやれと言う。勤務評定をやってないと言う事は無いんです。しかし、一定の書式に書くという評定はやってない。それを書けという。組合は反対だと言い、それを巡っての闘争です。教育課程を改定する。教育課程は教員が編成するものだ。文

部省や行政で作るものではない。文部省は国の教育水準を維持するために、教育課程の基本は文部省で決めなきやならん。その講習会をやる。これまた反対。そして、その頂点に達したのが昭和36年の学力調査でありました。中学校一斉学力調査、2年生、3年生の5教科の調査であります。このときは私は教育次長でありました。赤堀正雄さんという方が教育長をやっておられました。昭和36年は本当に暗い年がありました。年の始め、1月元日に松尾鉱山小学校で、元日の式典の後に子どもたちが薄暗がりの廊下に押し寄せて、階段のところで倒れて十人の子どもが亡くなつたわけであります。暗い幕開けであった。そして10月の学力調査で岩手県はいわゆる組合の拒否闘争のためにこれができなかつた。そしておよそ800名の校長さん、教頭さん、職員の皆さん方の懲戒処分が12月20日に行われた。年の初めから暮れまで、誠に暗い年であったということを赤堀さんが教育年報の『昭和36年の回顧』という中に書いてあります。そういう時代であったわけであります。県の議会からは、教育の正常化をしなければいけないという『正常化決議』というものが出てまいりました。県の教育委員会もその努力に努めたわけであります。

その当時の県の教育委員会の第一の重点施策は何であったかというと、『学力向上対策』であったわけです。これは、私がまだ社会教育課長をやっておった頃からずっと、学力向上対策が県教育行政の第一番目の基本だった。なぜならば、昭和31年度から昭和41年まで学力調査が行われたのであります。当時の岩手県の学力調査の結果は、抽出ではありますけれども、まず、全国最低位にあつたわけであります。文部省で順位を発表したわけではありません。しかし、時事通信かなんかの教育版に各県の点数が全部発表になり、その順位までが発表されてくるわけですから、我々には分るわけです。その当時は、沖縄がまだ県に入っておらず、46都道府県中46番目というのが、ずっと続いてきたわけであります。これはいけないというのはもつともなことだったと思うのであります。ですから、学力向上を図るためにはどうすればいいのだと教育長からほとんど毎日のように言われておつたものであります。私も学校の教員をやつた経験がありますからよく分かります。そして子どもの学力というものは、筆記試験の結果だけではないということは分かりながらも、それが最低で良いというわけではないわけであります。そんな状態でした。

教育振興基本計画の策定

昭和37年の暮れに赤堀教育長さんが転出をされまして、その後に私が教育長を命じられたわけであります。それで、教育庁の職員みんなに挨拶をした。昭和38年正月元旦の集まりで、当時、県は生活水準を高めるために経済計画を作り、総合開発計画を作ろうとしている。自分は先日まで教育次長として教育委員会を代表してその計画策定に参画してきた。

しかし、県が全国との格差解消を目指してそういう総合発展計画をつくるなら、教育委員会としても、教育水準の全国との格差解消を目指して教育の計画を作ろうではないか。昭和38年は、その県の教育振興基本計画を作る年にするぞ。みんなでやろう、と言って訴えたわけであります。ただ、教育の計画をどう作るか、ということは考えたことがなかったから、職員諸君もちょっと困った。あっけにとられたという感じであった。それでもすぐ、それに取りかかりました。

教育水準を全国と比べるのに、どういう見方をしたかというと、『普及度』、どれだけ教育が普及しているか。小中学校は義務教育ですから全部就学している。けれども、長期欠席というのである。年間50日以上学校に出ない子どもの率、それを比べると岩手は全国のほぼ倍あった。もちろんパーセントは1%か2%の低いものではありますが、長欠がきわめて高い。幼児教育、幼稚園、保育所の就園率がこれまた全国ほとんど最低。高等学校の進学率、岩手は当時40%台であります。50%に

ならなかつた。全国は65%ぐらいになつてゐました。どうしてこの差をつめるか。48年までには75%まで岩手の高校進学率を高めようという計画にしたわけであります。さらに大学の進学率。これも岩手は全国と比べて大変低い。たしか私の記憶では12~13%、全国は約30%。中身はあるのか。これは学力調査の結果以外にはない。とても高等学校の生徒や大学の生徒の学力は比較できないから、『普及度』、『学力度』をもつて、岩手の教育水準を全国と比べた。そうすると非常に低い。低いというよりも、最低と言つていい。幼児教育の就園率、つまり幼稚園・保育園の就園率と学力調査の結果というのはきわめて関連度が高い。

それから教育についての『民力』という表現が使われました。県民の教育に及はす力、つまり1か月の支出の中で子どもの教育のためにどれだけお金を出しているか。首長さんは財政の中で、どれだけ教育費にお金を出しているか。あるいは体育館とかプールとか理科教材とかそういう物の充足度が全国と比べてどうなのかといったような比較をおこなつたわけです。それはいわば教育的民力、間接的には県民の所得、一人当たりの県民所得はどうか、就業構造はどうか、農業、工業あるいは商業の全国の平均の所得と岩手県を比べるとどうか。これらが皆低い。学力の水準も、普及度も、教育の施設設備も、非常に深い関係を持っているわけあります。各県の経済力が明らかになった。それを分析して、どういう政策をとるかということを作り上げていったのが、教育基本計画なのであります。その教育基本計画では、県はこういう事をやる。高校の進学率はこうやって高めていくというように、いろいろなことを作った。その中で教育振興運動について触れているわけであります。それから30年たっているという事なのであります。

5 R運動

私は教育振興運動の5R運動というものについて、あるところで大きなヒントを与えられているのであります。そのヒントをどこで与えられたかと言いますと、アメリカで2か月旅行をさせてもらつた時にサンフランシスコの教育委員会からいろいろな資料を貰つた。その中に『スリーアール(3R)』というのがあった。Rというのは責任という意味です。親の責任、学校教員の責任、子どもの責任。例えば教師は親に対して子どもはこうであったと言う事をいちいち連絡すること。親は子どもの家庭生活の状況について学校に報告すること。子ども達は毎日親や先生の言う事を聞き勉強すること。この『3R』というのがパンフレットにあった。これはいいものだと持つて帰つた。

教育委員会の企画班の方々に「こういうのがあるんだけれど。これに『行政の責任』を入れよう。『地域社会の責任』も加えよう。そうすると5Rになる。5R運動というのをやろうじゃないか。」という話をしていた。それが教育基本計画の中に『父母に期待する事項』として書かれたものです。昭和38年度一杯かかって教育基本計画を作り、昭和39年の3月に仕上げたのですが、その中の『父母に期待する事項』という所に教育振興運動が取り上げてあるわけであります。本県の教育向上に必要なものは、児童生徒の学習意欲の高揚であるということを中心に据えて、教育行政に携わる者、教育指導を直接的に担当する教員、家庭教育の主体である両親、さらに環境を醸成する社会一般がそれぞれの機能からその責任を果たしていかなければならないということを書いて、もしここに教育振興運動として『5R運動』の仮称が許されるならば、その運動の中核体として、両親と教師の集団であるPTAこそが推進の中心となることを期待したいと書いたわけなのです。

昭和38年度に県の計画ができました。しかし、市町村立学校については校舎も、体育館も、教具教材も全て市町村教育委員会の責任であります。それで翌年は市町村の教育委員会にも計画を作つてもらう。県はそれを援助し、応援をしながら作る。本当によく作つていただきました。こうして、行

政はこういう責任を果たすよという事を明らかにして、そして昭和40年度に正式に教育振興運動の普及を始めたのです。したがって、正確に言えば話をし始めたのは30年前でありますけれども、市町村で教育振興運動をやりなさいと言ったのは、その翌々年になります。市町村も本当に頑張って教育振興運動の組織を作りました。1年間に50の市町村に推進組織ができました。

県都盛岡における推進

盛岡市は教育振興運動の組織をなかなか作らないんです。そして、私は県の教育長だったけれども盛岡市の議会に呼ばれまして、市議会議員の全員協議会で教育振興運動をしなければならない理由を説明してほしいということでした。そこで、市議会議員さん方に教育振興運動についてのご説明やら話し合いをして、確か一番最後ぐらいに盛岡市の教育振興協議会ができたように思います。その頃、県の社会教育課長の中村圭六さんを市の教育長にご推薦申し上げ、その後工藤さん、八重樫さんと、運動について理解されている方が教育長になられましたが、何よりも大きかったのは、岩手大学の黒沢誠先生が、盛岡市の推進協議会の会長さんになられたことです。黒沢誠先生は、「教育振興運動は大変いい考え方だ。こういうものがなくては岩手の教育は良くならないよ。」ということを話してくださっておったのです。この人が盛岡の推進協議会の会長になってくださったことは本当に良かったと思っておりました。

その後、私は盛岡市長を務めましたが、盛岡市の教育振興運動は小学校区単位、あるいは中学校区単位で進められました。この地区では、何を重点に教育振興運動をやるか、その報告会があるわけです。なかなか盛んな集まりで、我が地区では教育振興運動をこういうふうに進めている、私の方ではこういうふうに進めている、という発表が小学校区ごとにあり、そこに助言者として黒沢先生が推進協議会長として臨席していただく。ですから、盛岡市は腰が重くて取り掛かるのは一番遅かったけれども、こんなに安定してしっかりとやってくれているから、将来期待できると思っておりました。

その後、私が国会に参りましてから、昭和60年頃全国的にいじめの問題がありました。校内暴力の問題があった。校内で生徒が先生に暴力を振るったり、傷害事件を起こしたり、いじめ問題が出てきたりした時代がありました。その頃私は文部政務次官をやっておりましたが、盛岡に来てあるグループの方に、「盛岡ではいじめの問題はどうなってるのですか。」と聞きましたら、即刻そこにいたお母さん方が、「先生、大丈夫です。うちの学校では5R運動をやってますから、そういう心配はありません。」という答えが返ってきました。本当に力強い、嬉しい思いをしたことがあるわけあります。

各地の実践と成果

教育振興運動は各地域様々に展開されました。昭和38年に県の計画を作り、39年に市町村の計画を作り、40年から全県に展開した。モデルとして県南では大船渡市、県北では田野畠村を選び、そこをモデルにして典型育成をしようとした。大船渡市の特徴は学校が先頭に立つことでしょう。つまりPTAの会合をやってもお父さんお母さん方が学校に出て来ない。そこで部落公民館に先生が出ていて、夜とか休みの日に、部落の人達を集めて教育の懇談を開いた。これは学校主導というか、部落公民館に学校が出て行った。そういうやりかたです。大船渡市がやれば、陸前高田市も負けていられないわけで、同じ事をやった。そうすると住田町も、三陸町も、気仙全体がそういう形で教育振興運動の取り組みが始まった。もう一つの典型だった田野畠村は、まさに、村づくり即教育振興運動がありました。村を9つの区域に分けて、その地域づくり、部落づくりの教育を中心に始めた。その後、早稲田大学の『思惟の森』が始まり、アーラム大学との提携によりアーラム大学の学生さんが、

一番先に田野畠村を拠点にして岩手県に来てくれた。今、県内各地域で英語の教員として外国の先生方が来てくれていますが、その先鞭をつけたのが田野畠村なのです。

その当時、いろいろなことがありました。葛巻町で教育振興運動の集まりがありました。町民の方々が集まって、5R運動の代表がそれぞれ意見発表をするわけです。行政の代表として町長さんが葛巻の町政と教育振興の話をしました。地域の代表としては議長さんが。そして、学校の代表、児童生徒の代表として中学校の生徒さんが演説をやりました。「話によると、岩手県の教育や学力の水準は全国で一番低いそうだ。その中で、葛巻は最も低いレベルにあるそうだ。そして、お父さんやお母さん方や、町の人たちが教育のために一生懸命やってくれるというんだから、我々もそれに応えてしっかりやらなければならないと思います。」という本当に立派な演説をやってくれまして、満場の拍手をいただいたことを今もって忘れることができません。もうあの子どもさんも50近くなっているのでしょうか、もう30年も前の話です。葛巻町は具体的に『子どもに勉強部屋を持たせる運動をやろう』という事でした。その頃、葛巻でもそうだったが、子どもが勉強する机を持っていないのが普通でした。りんご箱に紙を張ったものを台にして、本を読んだり、字を書いたりできるんじやないですか。そういうふうに子どもに机を持たせることを考えたらどうですかと提案しました。葛巻町ではそれを運動に取り上げ、各家庭で『子どもに勉強部屋を与える運動』という名前で取り組まれました。その後、学校の古くなった机を更新するときに、子どもの机の無い家庭にそれを払い下げているということを聞きまして、こここの運動も地についてやっているなあという感じを覚えたことがあります。

こういうふうに教育振興運動は、様々な形で行われて参りました。考えて見ますと、岩手の教育水準というのは、非常に高まって参りました。いま我々は、岩手の教育水準が全国最低だなどと言わなくていい。学力調査は昭和41年で終わりましたから、全国と比べるよですがはないけれども、私が教育委員会を辞めて県の方に移って参りました頃には、岩手の学力の水準は、もう全国最低だということは言わなくてすむようにはなっていました。少なくとも最低の水準だとは言わなくてもいいところまでできていることが、数字の上でも明かになってきているという感想を、年報の回顧録に書いた記憶がございます。高等学校の進学率も、もう全国に引けを取りません。県民所得も下から3番目以内におったのが、今は下から7番目になっています。県民一人当たりの平均所得が、全国の7割であったものが、今は8割を越えています。それでいいということではありませんが、そういうことです。また、乳幼児の死亡率は全国で最低でした。毎年、乳幼児の死亡率の一番高い県は岩手でした。一番でなくとも下から2番目か3番目には入っていた。ところが今は、乳幼児の死亡率が低いほうから3番目ぐらい。全国のトップクラスで良いほうです。これは、みんなの努力の結集であります。みんなの努力が結集されるならば、必ずそういう成果は上がってくると思うのです。

岩手の子ども達のために

第3次県勢発展総合計画の中で、『豊かな自然の中に、活力と希望にあふれ、心のふれあうふるさと岩手の創造』という目標を掲げております。そして、しみじみとこの岩手で教育を受けて良かったと思うような、そういうふるさとを創ろうという事を述べております。私自身、岩手というところで、あの岩手山を眺めて、北上川のほとりを逍遙しながら少年時代を過ごしたということは、本当に良かつたと思っております。教育というものは点数ではない。筆記試験の点数ではない。そう思っています。教育振興基本計画の策定当時から、学校教育の優等生が社会教育の優等生ではないよということは言われておりました。その通りなのです。だけども、教育の責任者になって、岩手の教育の学力の水準はこうだよと見せられると、いやこれでいいのかと思った。これもやむを得ない。今はその当時

の友人達と共に、この山河自然の中に育ち、ここで教育を受けたことは、本当に良かったと思っているのであります。ただ、いつの時代でも考えなければならないことは、子ども達が持っている力を十分に伸ばしてやっているだろうかということです。私自身の子どもも含めて、常に反省するのですけれども、子ども達の持っている能力を十分に開発をし発揚させていくことが、岩手なるが故にできなかつたとしたならば、これは本当に申し訣ないことだと思うのです。なんとかして子ども達が力を存分に發揮できるだけの体制を作っていくかなければならない。五者の責任と連携でやっていかなければならないと思います。

県の議会でも質問されましたけれど、「お前は教育・教育と言っているけれども、どういう教育が望ましいと思うのか。」と聞かれたことがある。就任当初です。教育の姿というものを申し上げるのは、教育委員会の役割であり、知事がでしゃばりすぎて、そんな事を言うのは適當とは思いませんけれども、私の思うところの一つを申し上げた。子どもといつても、知能が劣っている子ども、知恵遅れの子ども、障害を持つ子ども、いろんな子ども達がいます。しかし、どんな子ども達も新しいことを学びとった、分かった、今日の先生のお話を聞いて本当に良く分かったという喜びというものを持っている。小さな子どもでもそうです。赤ん坊でもそうです。お父さん、お母さんのお話が分かった。覚えた。こういう喜びというものをもっているのだ。日々の生活や学校の教育の中で、何かを学び取っているという喜びを与え続けているならば、そして学校が楽しい生活の場であるならば、登校拒否なんて起こらない。いじめとか、そういう問題は起こらないと思う。これが私の望ましい教育として考えるものの一つだということをお話しました。学年だけが進行して、高等学校まで行ったけれども、中身はさっぱり覚えてないという教育ではいけないと思うのです。

岩手の教育水準は必ずしも高くないけれども、5年後、10年後には決してそうではないよ。そのために教育の基本計画を作ろうではないか。そのために教育振興運動を展開しようではないかという、大変な熱意に燃えて発足した教育振興運動が、今ここに30年を迎えました。ご理解を持った多くの皆様方のお力によって、さらに拡大発展され、地域社会の実態と要請に応えた形でこれから教育振興運動が展開されるであろうと思えば、大変心強い思いがするわけでございます。

どうぞ皆さん方、と一緒に、岩手のために、未来の子ども達の幸せのために、岩手の発展のために頑張って参りましょう。この事を申し上げまして私の話を終らさせていただきます。